

平成11年度
年報

HOKKAIDO MUSEUM OF LITERATURE
北海道立文学館・(財)北海道文学館

■ 目 次 ■

■文学館の歩み	1
■北海道立文学館の設立経緯	2
■北海道立文学館 5年間の歩み	3
■目的及び事業	8
■平成11年度事業概要	9
I 文学資料の収集・整理・保存及び閲覧事業	9
II 展覧会・文芸講演会等の開催事業	9
1 展覧会 (1) 常設展	9
(2) 特別企画展等	12
2 文芸講演会・講座等	15
III 文学に関する調査研究事業	17
IV 文学愛好団体等の活動に対する支援事業	18
V 啓発広報事業	18
VI 刊行物の刊行事業	18
VII 北海道立文学館の管理運営受託事業	19
VIII その他の付帯事業	19
■統計・資料	
展覧会別観覧状況 閲覧室利用状況 総括表	20
資料収集状況 主な購入特別資料一覧	21
■組織及び役職員	
組織機構図 役員等一覧	29
専門委員会構成一覧 職員名簿	30
■諸会議・運営日誌	31
＜付録＞北海道立文学館利用規則	33

■ 文学館の歩み ■

年 次	事 項	年 次	事 項
昭和42	北海道文学館設立総会、館報1号発行、有島武郎文学展		「氷原帯」創刊40周年記念展
43	文学に見る北方風物展	昭和63	北海道歌人会創立35周年記念展、北海道新聞文学賞展、『北海道文学読本』発行、没後30年久保栄文学展、近代日本の文豪一森鷗外展、財団法人北海道文学館設立
44	北海道旅の文学展	平成元	胆振文学展・目で見る風土と文学、俳句誌「葦牙」創刊700号記念展、北海道女流作家第一号森田たま展、北海道川柳展、作家生活25年記念三浦綾子展（札幌、旭川）
45	伊藤整・亀井勝一郎文学展	2	児童文学「新十津川物語」展（札幌、新十津川）、移動展・石川啄木と野口雨情展、文化情報誌「ニュースきょうどう・カムイミントラ」展、歌誌「新壱」創刊60周年記念展、北のロマンを奏でる一渡辺淳一文学展、市町村文芸誌展一道東・道北編
46	北海道詩歌展	3	市町村文芸誌展一道央・道南編、移動展・石森延男と室蘭の児童文学展、文学展・北海道花の歳時記、来道60年記念斎藤茂吉展、文芸誌「赤煉瓦」とその周辺展
47	目で見る札幌文学散歩	4	設立25周年記念・有島武郎と木田金次郎展、北電文化誌「フロンティア」著名作家原稿展、文学展・北海道花の歳時記（室蘭）、北の文学風物誌展（冬の巻）、らいらく文学賞展
48	藤村における旅資料展、久保栄文学展、札幌の文学・百年展	5	俳句誌「アカシヤ」500号記念展、札幌文学散歩展、没後25年・道立文学館着工記念伊藤整文学展、北海道詩人協会40周年記念展
49	文学にみる札幌風物展、北海道女流文学展、小田観螢・人と作品展	6	文学・北の歳時記展、文学展・札幌線沿線の旅、北の山と文学展、和田謹吾理事長死去
50	札幌の作家展（戦前の巻）、戦後30年・北海道文学展、札幌の作家展（戦後の巻）、川柳に見る戦後の札幌展	7	澤田誠一理事長就任、北海道立文学館開館記念特別展・北の夜明け、所蔵品展・私の愛した抒情詩人たち
51	碑にみる北の文学展、林不忘・長谷川四郎兄弟展、石狩川流域文学展、歌人・山下秀之助展	8	特別企画展・北海道の俳句、特別企画展・久保栄と北海道、所蔵品展・船山馨の文学世界
52	札幌の文学サークル展、文学展・北の海、札幌・戦後演劇展	9	特別企画展・森田たまと素木しづ、特別企画展・青春と文学、所蔵品展・書簡に探る作家の素顔
53	文学展・ふるさとの窓、北海道児童文学展、さっぽろの俳句展	10	特別企画展・北海道の短歌、特別企画展・有島武郎とヨーロッパ、企画展・吉田一穂とその時代
54	札幌市資料館に館看板揭示、現代北海道短歌展、風土のなかの文学碑展、『北海道文学地図』発行	11	特別企画展・夏目漱石と芥川龍之介、特別企画展・〈本〉はどこに向かうのか、所蔵品展・本庄陸男と『石狩川』
55	現代北海道俳句展、北海道岬文学展、児童文学と絵日記展—石森延男・その周辺—		
56	雑誌「北方文芸」展、石森延男児童文学展、館所蔵文芸雑誌閲覧開始、北海道岬・文学展、高橋留治氏から3000余冊の詩書等寄贈、北海道文学全集展		
57	島木健作文学展、船山馨文学展、北海道・湖文学展、鮫島交魚子・加藤愛夫文学展		
58	寺田京子・宮田益子・森みつ三人展、文学展・大地と人間、にんげん坂本直行展—その絵と文学—		
59	北海道児童文学全集展、北海道演劇資料展		
60	北海道文学展示室が常設展に移行、北海道俳句展、北原白秋展、文学にみる北方風物展、更科源蔵理事長死去、『北海道文学大事典』発行、地域文化功労者賞受賞		
61	日本の文学館風景展、和田謹吾理事長就任、歌誌「原始林」40周年記念展、「石川啄木と野口雨情」文学風物展、石森延男と札幌の児童文学展、詩誌「核」30周年記念展		
62	『北海道文学百景』『北海道文学絵はがき』発行、北海道文学館歩み展、北海道文学館20周年記念祝賀会および記念展、俳句誌		

■ 北海道立文学館の設立経緯 ■

昭和62年 9 月	北海道立文学館（以下、文学館と略）期成会が設立される。
昭和63年11月	財団法人北海道文学館設立が認可される。
平成 2 年 3 月	文学館設置調査費が議決される。
平成 2 年 8 月	文学館設置検討委員会が設置される。
平成 3 年 3 月	文学館設置検討委員会報告書が作成される。
平成 3 年10月	文学館基本構想が策定される。
平成 4 年 2 月	札幌市中央区中島公園内道有地が建設予定地に決定する。
平成 4 年 4 月	構想設計コンペ審査委員会が開催される。
平成 4 年11月	基本設計がまとまる。
平成 5 年 1 月	実施設計がまとまる。
平成 5 年 7 月	建設工事に着工。
平成 6 年12月	建設工事が完成。
平成 7 年 1 月 4 日	北海道立博物館条例の一部を改正する条例が施行される。 北海道立文学館利用規則が施行される。
平成 7 年 4 月 1 日	財団法人北海道文学館が北海道教育委員会より文学館の管理運営を委託される。平成 7 年度委託契約書締結。
平成 7 年 9 月22日	開館記念式典が挙行される。
平成 7 年 9 月23日	一般公開される。

■ 北海道立文学館 5年間の歩み ■

展覧会事業

年度	題 名	開 催 期 間	会 場	観覧者数
H 7 年 度	特別企画展 「北の夜明け」 ～海峡を越えた探検家・紀行家たち～	9月23日(土)～11月3日(金) (36日間)	当館特別展示室	3,983人
	所蔵品展 「私の愛した抒情詩人たち」 ～高橋留治・詩集コレクションから～	平成8年 1月16日(火)～3月17日(日) (54日間)	当館特別展示室	951人
H 8 年 度	特別企画展 「北海道の俳句」 ～戦後50年の歩み～	5月24日(金)～6月30日(日) (33日間)	当館特別展示室	1,249人
	特別企画展 「久保栄と北海道」 ～激動の時代を生きた劇作家の軌跡～	10月1日(火)～11月10日(日) (34日間)	当館特別展示室	1,248人
	所蔵品展 「船山馨の文学世界」	平成9年 1月14日(火)～3月16日(日) (52日間)	当館特別展示室	1,660人
H 9 年 度	特別企画展 「森田たまと素木しづ」 ～しなやかに煌く感性のかたち～	4月29日(火)～6月8日(日) (37日間)	当館特別展示室	1,465人
	特別企画展 「青春と文学」	9月27日(土)～11月7日(金) (34日間)	当館特別展示室	1,444人
	所蔵品展 「書簡に探る作家の素顔」	平成10年 1月17日(土)～3月8日(日) (43日間)	当館特別展示室	784人
H 10 年 度	特別企画展 「北海道の短歌」	4月25日(土)～5月31日(日) (33日間)	当館特別展示室	1,034人
	特別企画展 「有島武郎とヨーロッパ」 ～ティルダ、まだ僕のことを覚えていますか～	8月8日(土)～10月11日(日) (56日間)	当館特別展示室	2,860人
	企画展 「吉田一穂とその時代」 ～現代詩の極北をめざす～	平成11年 2月6日(土)～3月20日(土) (36日間)	当館特別展示室	907人
H 11 年 度	特別企画展 「夏目漱石と芥川龍之介」	8月7日(土)～9月5日(日) (26日間)	当館特別展示室	3,820人
	特別企画展 「〈本〉はどこに向かうのか」 ～活字本からデジタルへ～	9月25日(土)～12月5日(日) (58日間)	当館特別展示室	1,196人
	所蔵品展 「本庄陸男と『石狩川』」	5月1日(土)～6月20日(日) (41日間)	当館特別展示室	1,363人
	※企画展 「北欧叙事詩『カレワラ』の光彩」 ～中野北溟の書作による神話世界～	9月8日(水)～9月19日(日) (11日間)	当館特別展示室	1,939人
	※企画展 「VISUAL POETRY 2000 in 札幌」 ～〈視る詩〉の場所(トポス)へ～	平成12年 2月5日(土)～2月17日(木) (10日間)	当館特別展示室	561人

年度	題 名	開 催 期 間	会 場	観覧者数
H 7 年 度	※母と子の文学のつどい 「ようこそ賢治の教室へ」 宮沢賢治をめぐる連続講座 「かわいい賢治の歌のわかれ」 加藤多一（児童文学者） 「く賢治語」の、ひみつ」工藤正廣（北海道大学教授） 「『せはせはしく明滅する』詩」 斉藤征義（詩人） 「く語り」の構造ー童話から少年小説へー」 柴村紀代（児童文学者）	平成8年 3月26日(火)～ 4月7日(日)（12日間） 3月26日(火) 3月29日(金) 4月2日(火) 4月5日(金)	当館特別展示室 及び講堂	999人 受講総数 230人
H 8 年 度	たんけん文学館 「手島圭三郎の絵本の世界」（絵本原画展） （付帯事業） 「手作り絵本教室」 手島圭三郎（版画家） ※母と子の文学のつどい 「作るよろこび、知るたのしみ」 連続講座「子どもの文化を考える」 「マルチメディアと子どもの文化」 吉村 匠（北海道新聞社情報開発本部勤務） 「まどみちおの世界」 木村 雅信（札幌大谷短期大学教授） 「戦後まもなくの北海道絵本」 谷 暎子（北星女子短期大学教授） 「子どもを育てるわらべ唄」 佐藤 志美子（ひまわり保育園園長）	8月2日(金)～ 8月18日(日)（15日間） 8月9日(金)、11日(日) 平成9年 3月18日(火)～29日(日) （10日間） 平成9年 3月18日(火) 3月22日(土) 3月25日(火) 3月29日(土)	当館特別展示室 当館講堂 当館特別展示室 当館講堂	2,417人 120人 341人 受講総数 102人
H 9 年 度	たんけん文学館 「北の大地の動物たち」（絵本原画展） （付帯事業） 「手づくりうちわ教室」 「動物絵本との出会い」（講演）あべ弘士（絵本作家） ※母と子の文学のつどい 「絵本からとびだしたお友だち」 アニメ映画上映会 「トムとジェリーの大冒険」	7月26日(土)～ 8月17日(日)（20日） 7月30日(水)、31日(木) 7月30日(水) 平成10年 3月14日(土)～28日(土) （12日間） 3月14日(土)	当館特別展示室 当館講堂 当館講堂 当館特別展示室 当館講堂	2,259人 90人 50人 1,109人 71人
H 10 年 度	ファミリー文学館（たんけん文学館を改称） 「エッチングでさし絵づくり」（講習会） （付帯事業） 大井戸百合子（銅版画家） 「わたしの銅版画さくひん!」（作品展） 「絵本を読む・絵本を描く」 （作品解説とワークショップ） 大井戸百合子（銅版画家） ※母と子の文学のつどい 「大井戸百合子・銅版画による絵本原画とさし絵展」	7月25日(土)～30日(木) （5日間） 平成11年 1月9日(土)～17日(日) 1月9日(土)・10日(日) 1月9日(土)～17日(日) （7日間）	当館講堂 当館講堂 当館特別展示室 及び講堂	80人 465人 26人 491人
H 11 年 度	ファミリー文学館 「ぼくもわたしも絵本作家」（ワークショップ） 萩原睦子（手作り絵本作家） 「たかどのほうこ・子どもの本の世界」（絵本原画展） （付帯事業） 「わくわく・へんてこランド」たかどのほうこ（作家） 岸田典大（絵本パフォーマー） ※わくわく・子どもランド （母と子の文学のつどいを改称） 絵本読み聞かせ、人形劇などを実施	7月25日(日)～30日(金) （4日間） 平成12年 1月8日(土)～23日(日) （14日間） 1月16日(日) 平成11年5月～ 平成12年3月 毎月第2土曜日に 12回実施	当館講堂 当館特別展示室 当館講堂 当館特別展示室	38人 1,076人 351人 981人

講演会・セミナー等事業

年度	題 名	開 催 期 間	会 場	観覧者数
H 7 年 度	文芸講演会 「金子光晴『鬼の児』の詩学」 河邨文一郎(詩人)	平成8年2月10日(土)	当館講堂	120人
	文芸セミナー 「近藤潤一の俳句」 菱川善夫(北海学園大学教授)	12月2日(日)	当館講堂	90人
	「船山馨の文学」 神谷忠孝(北海道大学教授)	平成8年1月20日(土)	当館講堂	80人
H 8 年 度	文芸講演会 「俳句ーそのめぐり会いー」 星野紗一(俳人)	6月22日(土)	当館講堂	90人
	「久保栄回想」 山下 肇(東京大学名誉教授)	10月19日(土)	当館講堂	70人
	文芸セミナー 「中野重治と北海道の作家たち」 澤田誠一(作家)	7月13日(土)	当館講堂	90人
	「小説ができるまで」 小檜山博(作家)	10月5日(土)	当館講堂	80人
	「文学に見る北海道の女性たち」 藪 禎子(近代文学研究家)	11月17日(日)	当館講堂	50人
	「船山馨の文学資料をめぐって」 平原一良(当館事業課長)	平成9年2月1日(土)	当館講堂	60人
	※講演会 「ソウル・私・サッポローこの一年間のことー」 李恢成(作家)	10月10日(休)	当館講堂	90人
	「昭和22年・本道出版ブームと疎開系出版社の活動」 平澤秀和(近代文学研究者)	10月26日(土)	当館講堂	52人
	「私と小説」 渡辺淳一(作家)	平成9年3月26日(休)	ホテルライフォー 札幌大ホール	680人
	文芸映画上映会 「安部公房の世界」 「砂の女」	11月2日(土)	当館講堂	440人
	「他人の顔」	11月9日(土)		
	「燃えつきた地図」	11月16日(土)・30日(土)		
	「フィルムレクチャー 安部公房と映像」 高橋世織(早稲田大学教授)	11月16日(土)	当館講堂	90人
H 9 年 度	文芸講演会 「素木しづとその生き方」 沖藤典子(作家)	5月24日(土)	当館講堂	83人
	「小説を書くとき」 見延典子(作家)	10月18日(土)	当館講堂	97人
	文芸セミナー 「風土(北海道)と文学 ー小熊秀雄・三浦綾子を中心にー」 黒古 一夫(文芸評論家)	7月5日(土)	当館講堂	62人
	「人の知らない草の名をー子ども・文学・音楽」 松居スーザン(作家)	9月6日(土)	当館講堂	45人
	「北海道の現代俳句」 園田夢蒼花(俳人)	11月1日(土)	当館講堂	92人
	「島木健作の書簡などを読む」 田沢義公(当館学芸員)	平成10年1月24日(土)	当館講堂	25人
	「青春と文学を語る」 辻 仁成(作家)	5月30日(金)	札幌パークホテル	763人
	連続講座「有島武郎が生きた時代」 「北海道取材作とその周辺」 神谷忠孝(北海道大学教授)	平成10年2月7日(土)	当館講堂	52人
	「大正のユートピア思想と有島武郎」 中山昭彦(北海道大学助教授)	2月14日(土)	当館講堂	48人
	「『或る女のグリンプス』と大逆事件」 高山亮二(星座の会会長)	2月28日(土)	当館講堂	65人

年度	題 名	開 催 期 間	会 場	観覧者数
H 10 年 度	文芸映画上映会 「白痴」 「丹下左膳余話 百万両の壺」 「オズの魔法使い」 「博士の異常な愛情」 「フィルムレクチャー キューブリックと60年代の映像」 高橋世織(早稲田大学教授)	6月21日(土) 6月28日(土) 11月8日(土) 11月15日(土) 11月15日(土)	当館講堂 当館講堂	130人 56人
	※子どものための野外アニメ鑑賞会 「ドン松五郎の生活」	7月19日(土)	サンクンガーデン	
	文芸講演会 「アララギの歌人たちと北海道」 宮地伸一(歌人) 「スイスにおける日本文化の受容史」 ルネ・シュペヒト (スイス・シャフハウゼン市立図書館長)	5月23日(土) 8月8日(土)	当館講堂 当館講堂	184人 38人
	「有島武郎とわたし」 永畑道子(作家・熊本近代文学館長)	9月12日(土)	当館講堂	87人
	文芸セミナー 「俳句で考えたこと」 辻脇系一(俳人) 「有島武郎と札幌の家」 前川公美夫(有島研究家) 「風土に育つ文学」 鳥居省三(釧路短期大学教授) 「吉田一穂の遺したもの」 平原一良(当館事業課長)	7月4日(土) 8月22日(土) 10月24日(土) 平成11年3月13日(土)	当館講堂 当館講堂 当館講堂 当館講堂	62人 69人 21人 45人
	※講演会等 「有島武郎生誕100年記念事業」 シンポジウム「有島武郎とスイス」 R・シュペヒト (スイス・シャフハウゼン市立図書館長) 神谷忠孝(北海道大学教授) ハイコ・ナロック(北海道大学助教授) 高山亮二(星座の会会長) 平原一良(当館事業課長)	8月9日(日)	札幌芸術の森 レクチャールーム	61人
	作品鑑賞のつどい第1回「『星座』を読む」 藪 禎子(近代文学研究者)	8月23日(日)	当館講堂	45人
	講座第1回「有島武郎のアメリカ」 栗田廣美(白梅学園短期大学教授)	9月5日(土)	当館講堂	55人
	音楽と朗読の夕べ 「有島武郎が聴いたティルダの歌声」 vo 浅里いづみ、p 浅井智子	9月11日(金)	地階ロビー	79人
	講座第2回「新渡戸稲造・内村鑑三と有島武郎」 高山亮二(星座の会会長)	9月26日(土)	当館講堂	95人
	作品鑑賞のつどい第2回 「『カインの末裔』を読む」 工藤正廣(北海道大学教授)	9月27日(日)	当館講堂	66人
	文学館フォーラム「有島文学の現代性」 神谷忠孝(北海道大学教授) 井上理恵(吉備国際大学助教授) 中山昭彦(北海道大学助教授) 山田俊治(横浜市立大学助教授)	10月3日(土)	札幌時計台講堂	96人
	※吉田一穂生誕百年記念事業関連特別講演会 「白鳥古丹と吉田一穂」 添田邦裕(詩人)	平成11年2月6日(土)	当館講堂	54人
	映像作品鑑賞のつどい 「氷点」 「幻の光」 「華の乱」	6月21日(日) 6月28日(日) 11月7日(土)	当館講堂 当館講堂 当館講堂	56人 15人 50人

年度	題 名	開 催 期 間	会 場	観覧者数
H 11 年 度	フィルムレクチャー 「映画創成期とアヴァンギャルド映画」 中島 洋(シアターキノ代表)	11月14日(土)	当館講堂	78人
	文芸講演会 「夏目漱石と世紀末」 小森陽一(東京大学教授)	8月7日(土)	道立近代美術館 講堂	312人
	「マー兄ちゃんのちょっといい話」 北野 大(淑徳大学教授)	9月29日(木)	ホテル ライフォート札幌	450人
	文芸セミナー 「岩出山土族の自費移住について」 坂田資宏(歌人)	5月22日(土)	当館講堂	163人
	「アイヌ語・言葉の位牌を背負った者の一人として」 萱野 茂(萱野茂二風谷アイヌ資料館館長)	7月17日(土)	当館講堂	74人
	「展示解説 デジタル化する本の世界」 青柳文吉(当館学芸員)	10月16日(土)・11月3日(休)	当館特別展示室	42人
	「伝統川柳と現代川柳のはざま」 斎藤大雄(川柳作家)	平成12年2月5日(土)	当館講堂	114人
	※特別講演会 「歴史の舞台と私」 吉村 昭(作家)	10月22日(金)	函館市芸術ホール	525人
	「開拓地の思想」 池澤夏樹(作家)	11月19日(金)	旭川市大雪 クリスタルホール	213人
	※講演会等 「一日全講 本庄陸男『石狩川』を読む」 工藤正廣(北海道大学教授)	6月6日(日)	当館講堂	35人
	「『我が輩は猫である』と夏目漱石」 高橋康雄(札幌大学教授)	8月28日(日)	当館講堂	116人
	「カレワラ・・・北の風土から芽ぶくもの」 原子 修(札幌大学教授)	9月12日(日)	当館講堂	137人
	「対論(視覚)の時代を越えて・・・」 山口昌男(札幌大学学長) 村上善男(美術家・詩人) 支倉隆子(詩人) 野坂政司(北海道大学教授)	平成12年2月6日(日)	当館講堂	61人
	映画作品鑑賞のつどい 「大地の侍」	6月5日(土)・19日(土)	当館講堂	267人
	「それから」	11月20日(土)	当館講堂	72人
	「南京の基督」	11月27日(土)	当館講堂	110人

※印の事業は財団の独自企画事業を示す

■ 目的及び事業 ■

北海道立博物館条例（抄）

第1条 北海道における教育、学術及び文化の振興を図るため、北海道立博物館（以下「博物館」という。）を設置する。

第2条 博物館の名称及び位置は、次のとおりとする。

名 称	位 置
北海道立北方民族博物館	網走市
北海道立文学館	札幌市

第5条 教育委員会は、公共団体又は公共的団体に対し、博物館の管理を委託することができる。

財団法人北海道文学館寄附行為（抄）

（昭和63年11月1日 北海道教育委員会許可
平成7年2月2日 北海道教育委員会一部変更認可
平成7年4月7日 北海道教育委員会一部変更認可）
（目的）

第3条 この法人は、北海道にゆかりのある文学資料を収集保存し、広く道民の利用に供するとともに北海道の風土に根ざした文学の振興に必要な事業を行い、もって北海道の文化の創造と発展に寄与することを目的とする。

（事業）

第4条 この法人は、前条の目的を達成するため、北海道の区域内において次の各号に掲げる事業を行う。

- (1) 北海道にゆかりのある文学資料を収集、整理、保存し、及び道民の利用に供すること。
- (2) 文学に関する展覧会、文芸講演会、文芸講座等を開催すること。
- (3) 文学に関する調査研究を行うこと。
- (4) 文学愛好団体等の活動に対し支援すること。
- (5) 道民の文学に対する関心を高めるため啓発広報活動を行うこと。
- (6) 文学に関する各種刊行物を編集及び刊行すること。
- (7) 北海道教育委員会の委託を受けて、北海道立文学館の管理運営を行うこと。
- (8) 前各号に掲げる事業に附帯する事業。

北海道立文学館利用規則（抄）

（北海道教育委員会規則平成7年1月4日施行）

（文学館の目的）

第1条の2 北海道立文学館（以下「文学館」という。）は、文学に関する書籍、原稿、書簡、文献、写真その他の資料及び文学者の遺品等（以下「文学資料」という。）を収集し、保存し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、併せてこれらの資料に関する調査研究を行うことを目的とする。

（文学館の事業）

第1条の3 文学館は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。

- 1 文学資料を収集し、保管し、及び展示すること。
- 2 文学館が収集した文学資料を閲覧に供すること。
- 3 文学に関する展覧会、講演会、講座、映画鑑賞会その他の催し（以下「文学に関する催し」という。）を開催し、及び他の行うそれらの催しに協力すること。
- 4 一般公衆に対して、文学資料の利用に関し、必要な説明、助言等を行うこと。
- 5 特別展示室又は講堂（以下「特別展示室等」という。）を文学に関する催しの利用に供すること。
- 6 文学及び文学資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。
- 7 文学資料の保管、展示等に関する技術的研究を行うこと。
- 8 文学に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書を作成し、及び配布すること。
- 9 他の文学館、図書館、美術館、博物館、研究機関等と緊密に連携し、及び協力し、刊行物及び情報の交換、文学資料の相互貸借等を行うこと。
- 10 地域における学校、図書館、公民館等の教育又は文化に関する諸施設が行う文学に関する活動を援助すること。
- 11 その他文学館の目的を達成するために必要な事業

■ 平成11年度事業概要 ■

I 文学資料の収集・整理・保存及び閲覧事業

寄附行為第4条第1号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 寄贈資料受入れ総数（図書・雑誌及び特別資料） 4,383点
- 購入図書・雑誌 1,269点
- その他の購入特別資料 485点
- レプリカ作成・VTR、テープ、CD 3点

（別掲の統計・資料編資料編「資料収集状況」欄参照）

整理・保存	カード作成及び収蔵資料のコンピュータ入力並びに収蔵資料の寄贈・寄託目録作成等
閲覧	利用者 延べ3,266人

II 文学に関する展覧会・文芸講演会等の開催事業

寄附行為第4条第2号に掲げる事業は、次のとおり行った。

1 展覧会事業

(1) 常設展「北海道文学の流れ」

会期	通年
会場	北海道立文学館常設展示室
入場者	9,736人

展示の構成・内容は開館当時のものを踏襲しているが、昨年度の「北海道の詩」コーナーの展示替えに続き館の新収蔵資料、未公開資料などを順次公開していく特設コーナーを常展室内に設置し、小林多喜二「故里の顔」自筆原稿、本庄陸男新資料などを公開した。

以下に、展示編成の基本を掲げておく。なお、〔 〕内は監修者名を示す。

〈札幌農学校と有島武郎〉〔高山亮二〕

このコーナーでは、ウィリアム・S・クラークの事蹟によって広く知られている札幌農学校（現、北海道大学。明治9年開校）の存在と活動を紹介するとともに、その農学校に学び、のちに母校の教壇に立って多くの後進を育成し、文学者・思想家として日本近代史に刻まれる仕事を残した有島武郎について、内村鑑三、新渡戸稲造、森本厚吉、ティルダ・ヘックらとの交流を含め、通算12年間にわたる本道在住期の足跡を概観した。

〈北海道文学の流れ—明治・大正期〉〔木原直彦〕

このコーナーで取り上げた主な文学者・関連人物名、事項名は次のとおりである（以下同）。

* 「空知川の岸辺」国木田独歩

国木田独歩、佐々城信子

* 開拓期を彩る作家群

岩野泡鳴、幸田露伴、長田幹彦、島崎藤村、葛西善蔵、徳富蘆花ほか

* 漂泊の人・石川啄木

石川啄木、石川節子、橘智恵子、野口雨情ほか

* 有島武郎をめぐる人々

有島武郎、有島生馬、里見弴、武者小路実篤、志賀直哉

* 道産子作家誕生

武林無想庵、岡田三郎、森田たま、中戸川吉二、中村武羅夫、子母沢寛、素木しづ、長谷川海太郎

* 同人雑誌群

「路上」「路傍人」「君影草」「白夜」「歩み」ほか

* 来道作家の足跡（大正期）

文学地図（足跡図）—吉屋信子、宮本百合子、橘外男、宮沢賢治、宇野千代、長田幹彦、久米正雄ほか

〈北海道文学の流れ—昭和前期〉〔西村信〕

* プロレタリア文学の潮流

葉山嘉樹、小林多喜二、久保栄、小熊秀雄、島木健作、本庄陸男ほか

* 若い詩人の肖像

伊藤整、川崎昇ほか

* 来道作家の足跡（昭和前期）

芥川龍之介、里見弴、鶴田知也ほか

* 農民文学の世界

吉田十四雄、辻村もと子、板東三百、早川三代治、坂本直行ほか

* 戦時下の文学

林容一郎、中津川俊六、八木義徳、寒川光太郎ほか

〈北海道文学の流れ—昭和後期〉〔神谷忠孝〕

* 戦後文学の展開

風巻景次郎、武田泰淳、宇野親美、中沢茂、澤田誠一、木野工ほか

* さまざまな座標Ⅰ

船山馨、亀井勝一郎、八木義徳、和田芳恵、長谷川四郎、李恢成、重兼芳子、高橋揆一郎、小檜山博ほか

* 旋風をおこした作家たち

原田康子、三浦綾子、渡辺淳一

* さまざまな座標Ⅱ

荒巻義雄、藤堂志津子、佐藤泰志、川又千秋、佐々木譲、土居良一ほか

* 来道作家の足跡（昭和後期）

福永武彦、戸川幸夫、新田次郎、水上勉、開高健、大江健三郎ほか

* 活躍する作家たち

三浦清広、加藤幸子、沖藤典子、久間十義、見延典子、辻仁成、谷村志穂

〈北海道の詩〉〔永井浩〕

* 草創期

児玉花外、高村光太郎、三木露風、宮沢賢治、北原白秋

* 生成期

更科源蔵、吉田一穂、左川ちか、猪狩満直、鈴木政輝、加藤愛夫、和田徹三ほか

* 戦争と詩

百田宗治、今井鴻象、鷺巣繁男、三谷木の実、牧章造ほか

〈北海道の短歌〉〔田村哲三〕

* 北海道歌壇の動き

山下秀之助、酒井広治、小田観螢、中城ふみ子ほか

* 来道歌人

斎藤茂吉、与謝野寛、与謝野晶子、斎藤史、宮柊二ほか

* 口語短歌

鳴海要吉、石川啄木ほか

* アイヌの歌人

バチラー八重子、達星北斗、森竹竹市ほか

〈北海道の俳句〉〔木村敏男〕

* 北方俳句の夜明け

松窓乙二、河東碧梧桐、牛島藤六、高浜虚子、長谷川零餘子、臼田亜浪、石田雨圃子、青木郭公ほか

* 俳句近代化への潮流

荻原井泉水、泉天郎、長谷部虎杖子、唐笠何蝶、細谷源二、土岐鍊太郎、伊藤凍魚、水野波陣洞ほか

* 花ひらく北の俳句

斎藤玄、寺田京子、比良暮雪、佐々木丁冬ほか

* 俳句の現代

比良暮雪、佐々木丁冬、鮫島交魚子、園田夢蒼花、山岸巨狼ほか

〈アイヌの口承文芸〉〔藤本英夫〕

金田一京助、知里真志保、久保寺逸彦、金成マツ、知里幸恵、萱野茂

〈北海道の川柳〉〔斎藤大雄〕

* 明治～昭和前期

鈴木青柳、北村白眼子、亀井花童子、神尾三休、三輪破魔杖、井上剣花坊、鶴彬、西嶋〇丸、
田中五呂八ほか

* 昭和後期～平成7年

西村欣童、高木夢二郎、森田一二、甲野狂水、古田八白子

* 北海道の川柳社

道央、道南、道東、道北の各結社の活動と結社誌等を紹介。

〈北海道の児童文学〉〔柴村紀代〕

* 明治～昭和20年代

伊東音次郎、支部沈黙、坪松一郎ほか

* 昭和30年代

石森延男、神沢利子、安藤美紀夫、渡辺ひろし、玉川雄介ほか

* 昭和40年代以降

加藤多一、後藤竜二、長野京子ほか

〈千島・樺太の文学〉〔木原直彦〕

夏堀正元、吉村昭、李恢成、寒川光太郎ほか

(2) 特別企画展

●「夏目漱石と芥川龍之介」

会 期 平成11年 8 月 7 日(土)～9 月 5 日(日) (26日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 3,820人

特別企画展「夏目漱石と芥川龍之介」は日本近代文学館（東京）収蔵の資料を中心に、東京都近代文学博物館、神奈川近代文学館など六機関・四氏の協力により実現したもので、重文級の逸品を数多く公開した。漱石、芥川が小説家として卓越した技量を備えていたばかりでなく、書や絵画にも大きな関心を寄せ、それぞれに個性あふれる「作品」をのこしたことを明らかにする展示内容となった。また、両者の俳句短冊や、二人の文豪の著書を装丁した橋口五葉や津田青楓、小穴隆一などの装丁原画などにも関心が集まった。

また、漱石と芥川の交流を示す書簡や二人の交友圏の広さと足跡を表わす書簡、葉書、日常に使用していた遺品などに見入る人々も多く、二人の文豪とその文学世界への関心の高さがうかがわれた。

●「〈本〉はどこに向かうのか～活字本からデジタルへ～」

会 期 平成11年 9 月25日(土)～12月 5 日(日) (58日間)

会 場 北海道立文学館特別展示室

入場者 1,196人

コンピュータやインターネットの普及にともない、活版印刷を継承してきた本の世界も大きな変革期を迎えている。本が手元に届くまでには、まず「書く」という行為があり、その後編集・印刷、流通・販売という過程を経る。現代では、ワード・プロセッサで「書く」ことが普通となり、編集・印刷も含めて多くの作業がコンピュータ上でなされるようになってきている。本特別企画展では、本の過去、現在、未来の紹介を通じて、デジタル化の進む社会と「本」とのかかわりを追求した。

展示会場では、入館者がCD-ROM上の電子書籍やインターネット上で公開されている文学作品を、コンピュータを操作しながら実体験できるようにしたほか、軽印刷（はがき印刷）による活版印刷の実演、ガリ版印刷の体験、DTP（デスクトップ・パブリッシング）印刷の実演など、体験型の展示方法とした。体験を通じて印刷の歴史をふりかえり、コンピュータネットワークを通じた最新の書籍情報に触れることのできる工夫が、入館者の驚きと好評を呼んだ。

●所蔵品展「本庄陸男と『石狩川』」

会 期 平成11年 5月1日(土)～6月20日(日) (41日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 1,363人

本企画展では、当別での誕生から小説『石狩川』第1部を出版してまもなく他界するまでの本庄陸男の生涯と、代表作『石狩川』と史実との照応関係に焦点をしばった展示を行った。山田昭夫前藤女子大教授から借用した「白い壁」をはじめとする多くの直筆原稿は、昭和初頭の困難な時代状況のなかで苦闘した本庄の創作過程をうかがわせるものであり、また、会期中に展示した米国メリーランド大学プランゲ文庫蔵の『石狩川』G HQ検閲用稿本は占領下日本の検閲の実態を知る貴重な資料として反響を呼んだ。

企画展の実施に際し、現在刊行中の本庄全集にかかわる八子政信氏から「本庄陸男作品年譜」の提供を受けたほか、坂田資宏氏による文芸セミナー、『石狩川』を原作とする映画「大地の侍」(昭和31年)の上映会、工藤正廣氏を講師としておこなった「一日全講 『石狩川』を読む」などを行い、それぞれ予想をこえた盛況ぶりであった。

※ 企画展「北欧叙事詩『カレワラ』の光彩～中野北溟の書作による神話世界～」

会 期 平成11年 9月8日(水)～9月19日(日) (11日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 1,939人

本企画展は、北欧のフィンランドに古代から伝わり、今なお国民に広く愛唱されている叙事詩「カレワラ」の詩篇(小泉保 訳)を書によって表現した中野北溟氏(書家、札幌市在住)のダイナミックな作品30点余りを中心に構成したもので、11日間の会期中に千人を超える入館者があった。中野氏は、この企画展がもとで先ごろ毎日芸術賞を受賞している。また、企画展と同名の氏の作品集(財団法人北海道文学館編集)も刊行され、好評を得た。

※ 企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌～〈見る詩〉の場所へ～」

会 期 平成12年 2月5日(土)～2月17日(木) (10日間)
会 場 北海道立文学館特別展示室
入場者 561人

高橋昭八郎氏(詩人、佐賀県在住)を委員長とする実行委員会との共催として実施された企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌～〈見る詩〉の場所へ～」では、「ヴィジュアル・ポエトリー」(見る詩、あるいは視覚詩)を手がける国内の詩人たちのほかイタリア、フランス、ドイツなど海外6カ国の詩人の作品を展示した。ゲストとして出品した山口昌男氏らのドローイングやインスタレーションも含め、130点余りの多彩な作品で構成され、詩とアートの交響空間となった特別展示室は10日間で600人近くの入館者を迎えることができた。

(3) ファミリー文学館

●夏休みファミリー文学館「ぼくもわたしも絵本作家」(ワークショップ)

会 期	平成11年7月25日(日)～7月30日(金)(4日間)
会 場	北海道立文学館講堂
講 師	萩原睦子氏(手作り絵本作家)
参加者	38人

手作り絵本のワークショップ「ぼくもわたしも絵本作家」は、参加する子どもたちが自ら主役となって、世界に一つしかない自分だけの手作り絵本をつくることを目的として実施され、札幌市在住の手作り絵本作家萩原睦子氏の指導のもとに小学校3・4年生の部、5・6年生の部とに分かれ、オリエンテーションを含めそれぞれ3日間の日程で、絵本の完成をめざした。また、完成した作品は冬休みファミリー文学館「たかどのほうこ・子どもの本の世界」にあわせて展示された。

●冬休みファミリー文学館「たかどのほうこ・子どもの本の世界」(絵本原画展)

会 期	平成12年1月8日(土)～1月23日(日)(14日間)
会 場	北海道立文学館特別展示室
入場者	1,076人

冬休みファミリー文学館は「たかどのほうこ・子どもの本の世界」と題して、札幌市在住の絵本、児童文学作家高楼方子氏の絵本原画展を開催した。100点余りの原画に加え、地域の開放図書館ボランティアの方々によって、手作りのアクセサリー等による会場の装飾が行われ、親しみやすい雰囲気作りがなされた。また、会期中には、4回にわたり展示室内で高楼作品の読み聞かせ会や子どもカルタ会が行われ、冬休み期間ということもあり、連日、子どもたちの歓声が絶えなかった。

〈付帯事業〉

●わくわく・へんてこランド(わくわく・子どもランド冬休みスペシャルとして実施)

期 日	平成12年1月16日(日)
会 場	北海道立文学館講堂
入場者	351人
出 演	高楼方子、岸田典大

わくわく・へんてこランドは、作者高楼方子氏による自著絵本朗読、および千歳市在住の絵本パフォーマー岸田典大氏の絵本読み聞かせパフォーマンスで構成した。絵本朗読の場面では、スクリーンにその頁を写し出す試みがなされ、入場者の好評を得た。また、事業終了後、地階ロビーにて作者のサイン会を行った。

(4) わくわく・子どもランド（「母と子の文学のつどい」を改称）

※～わくわく～こどもランド

会 期	平成11年5月～平成12年3月（毎月第2土曜日 11回実施）
会 場	北海道立文学館講堂
参加者	981人
出 演	人形劇団「豆の木」、「おはなしなあに」ほか

わくわく・子どもランドは、平成11年5月から平成12年3月まで、毎月の第2土曜日を中心に11回の催しを行った。内容も、絵本読み聞かせ、パネルシアター、ボードビル、人形劇、腹話術などバラエティーに富んだものを、地域のボランティアサークル等の協力で実施でき、毎回多くの子どもたちや付き添いのご両親に楽しんでいただくことができた。

2 講演会・講座等事業

(1) 文芸講演会

●演 題	「夏目漱石と世紀末」
講 師	小森 陽一（東京大学教授）
日 時	平成11年8月7日（土）午後2時
会 場	北海道立近代美術館講堂
聴講者	312人

●演 題	「マー兄ちゃんのちょっといい話」
講 師	北野 大（淑徳大学教授）
日 時	平成11年9月29日（水）午後6時
会 場	ホテル・ライフオー・札幌ホール
聴講者	450人

(2) 特別講演会

※演 題	「歴史の舞台と私」
講 師	吉村 昭（小説家）
日 時	平成11年10月22日（金）午後6時
会 場	函館市芸術ホール
聴講者	525人

※演 題	「開拓地の思想」
講 師	池澤夏樹（小説家）
日 時	平成11年11月19日（金）午後6時
会 場	旭川市大雪クリスタルホール
聴講者	213人

(3) 文芸セミナー（会場は、特記したものの他はいずれも北海道立文学館講堂）

- 演 題 「岩出山土族の自費移住について」
講 師 坂田資宏（歌人）
日 時 平成11年 5 月22日（土）午後 2 時
聴講者 163人
- 演 題 「アイヌ語・言葉の位牌を背負ったものの一人として」
講 師 萱野 茂（萱野茂二風谷アイヌ資料館館長）
日 時 平成11年 7 月17日（土）午後 2 時
聴講者 74人
- 演 題 「展示解説 デジタル化する〈本〉の世界」
講 師 青柳文吉（当館学芸員）
日 時 平成11年10月16日（土）、11月 3 日（水）ともに午後 2 時
会 場 北海道立文学館特別展示室
聴講者 42人
- 演 題 「伝統川柳と現代川柳のはざま」
講 師 斎藤大雄（川柳作家）
日 時 平成12年 2 月 5 日（土）午後 2 時
聴講者 114人

(4) 文芸講座等

- ※ 演 題 「一日全講 本庄陸男『石狩川』を読む」
講 師 工藤正廣（北海道大学教授）
日 時 平成11年 6 月 6 日（日）午前10時
聴講者 35人
- ※ 演 題 「『我が輩は猫である』と夏目漱石」
講 師 高橋康雄（札幌大学教授）
日 時 平成11年 8 月28日（日）
聴講者 116人
- ※ 演 題 「カレワラ…北の風土から芽ぶくもの」
講 師 原子 修（札幌大学教授）
日 時 平成11年 9 月12日（日）午後 2 時
聴講者 137人

※演 題 「対論〈視覚〉の時代を越えて…」
 対談者 ①山口昌男（札幌大学学長）・村上善男（美術家・詩人）
 ②支倉隆子（詩人）・野坂政司（北海道大学教授）
 日 時 平成12年2月6日（日）午後1時30分
 聴講者 61人

(5) 映像作品鑑賞のつどい

●作品名 「大地の侍」
 日 時 平成11年6月5日（土）／6月19日（土）午後2時
 入場者 122人／145人

●作品名 「それから」
 日 時 平成11年11月20日（土）午後2時
 入場者 72人

●作品名 「南京の基督」
 日 時 平成11年11月27日（土）午後2時
 入場者 110人

(6) ロビーコンサート

※内 容 Baker Street X'mas Live（ジャズ演奏と原詩朗読）
 日 時 平成11年12月18日（土）午後6時
 会 場 北海道立文学館地階ロビー
 出 演 碓昭一郎とThe Baker Street
 原詩朗読 熊谷ユリヤ（札幌大学助教授）
 入場者 60人

III 北海道文学に関する調査研究事業

寄附行為第4条第3号に掲げる事業は、次のとおり行った。（いずれも国内）

- 本庄陸男関連資料調査
- 和田徹三資料調査
- 更科源蔵資料調査
- 立原道造記念館等資料受入、整理実態調査
- 特別企画展、企画展の図録・リーフレット作成
- 高橋留治文庫目録作成に関わる調査

IV 文学愛好団体等の活動に対する支援事業

寄附行為第4条第4号に掲げる事業は、次のとおり行った。

次の団体の事業に対して、後援名義並びに主催名義の使用を承認して支援した。

- 星座の会

文学講演会（3回）

（平成11年7月3日、9月18日、10月3日 北海道立文学館講堂）

- 斎藤茂吉記念中川町短歌フェスティバル実行委員会

「斎藤茂吉記念第6回中川町短歌フェスティバル99」

（平成11年9月17日、18日 中川町山村開発センター）

- NHK文化センター朗読教室（松井教室）

「北海道ゆかりの文学を読む」

（平成11年9月26日 北海道立文学館講堂）

- 日本児童文学者協会北海道支部

児童文学学校

（原則として10月～3月の第1、第3木曜日に開校 北海道立文学館講堂）

- 絵本・児童文学研究センター

「第4回文化セミナー『家族』」

（平成11年11月28日 小樽市民会館）

- 北海道新聞社

「1999 Hokkaido 読み聞かせワールド」

（平成11年11月28日 北海道立文学館講堂）

- 「金子みすゞの世界展」旭川実行委員会、朝日新聞社

「幻の童謡詩人 金子みすゞの世界展」

（平成12年1月14日～同23日 旭川市民文化会館）

V 啓発広報事業

寄附行為第4条第5号に掲げる事業は、次のとおり行った。

- 施設案内、常設展リーフレット、各展覧会ポスター・ちらし及び講演会・セミナーちらし等を制作、発行。

- 広報誌「サンクンガーデン」第8号（平成11年10月）、第9号（平成12年3月）の編集発行。

※「北海道文学館報」第50号（平成11年7月）、第51号（平成11年12月）の発行。

VI 刊行物の刊行事業

寄附行為第4条第6号に掲げる事業は次のとおり行った。

- 特別企画展「夏目漱石と芥川龍之介」図録（B5版、44頁）の刊行

- 所蔵品展「本庄陸男と『石狩川』」パンフレット及び「本庄陸男作品年譜」の刊行

- 企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌」図録（A5版、28頁）

- 『北欧叙事詩「カレワラ」の光彩』（A変形版、114頁）の刊行

- 『収蔵資料目録 高橋留治文庫』（A4版、96頁）の刊行

VII 北海道立文学館の管理運営事業

寄附行為第4条第7号による道立文学館の管理運営は、北海道と当財団との間に取り交わされた委託契約（4月1日締結）に基づき、適切に行った。

VIII その他の付帯事業

●博物館学芸員実習生の受け入れ及び実習指導

平成11年8月及び12月に各5日間（計10日間）、札幌大学学生（3人）と札幌学院大学生（2人）に対し行った。

※古書市99 文芸お楽しみバザール

平成11年9月18日（土）、19日（日） 文学館1階ロビーで実施。

- ・ミニ古書市は地階にて通年実施。ともにチャリティーバザール実行委員会（田村哲三委員長）との共催。

※印の事業は財団の独自企画のものを示す

■ 統計・資料 ■

展覧会別観覧状況

区 分	常 設 展	特 別 企 画 展		所 蔵 品 展	計	ファミリー文学館	
	北海道文学の流れ	夏目漱石と芥川龍之介	〈本〉はどこに向かうのか	本庄陸男と『石狩川』		ぼくもわたしも絵本作家	たかどのほうこ子供の本の世界
開 催 日 数	297日	26日	58日	41日	297日	5日	14日
観覧者総数	9,736人	3,820人	1,196人	1,363人	16,115人	38人	1,076人
有 個 人 料 体	一 般	3,473	1,754	244	390	5,861	
	大学生	298	169	24	7	498	
	高校生	222	16	7	21	266	
	小中生	1,576	61	7	126	1,770	
	小 計	5,569	2,000	282	544	8,395	
	一 般	2,243	1,177	522	432	4,374	
	大学生	292	116	136	13	557	
	高校生	38	48	0	0	86	
	小中生	10	82	16	0	108	
	小 計	2,583	1,423	674	445	5,125	
	免 除	1,584	397	240	374	2,595	
	合 計	9,736	3,820	1,196	1,363	16,115	

※ 小中高生は、常設展及び所蔵品展は無料。

閲覧室利用状況

区 分	人数・件数	1 日平均
開 室 日 数	297日	
利 用 者 数	3,266人	11人
レファレンス件数	152件	0.5件
資 料 閲 覧 件 数	158件	0.5件

事業種別来館状況（総括）

受 託 事 業	区 分	利用者数
	展覧会事業	16,115人
	閲覧事業	3,266
	講演会・セミナー事業	1,309
	文芸映画上映会事業	449
	その他の教育普及事業	1,076
財団独自事業		3,774
計		25,989

資料収集状況

区 分	購入点数	受贈点数	受託点数	特別資料内訳			
				区 分	購 入	受 贈	受 託
図書	676	840	0	原稿	174	71	288
雑誌	593	3,366	0	書簡	76	12	67
CD-ROM	2	0	0	色紙・短冊	2	2	7
VTR・テープ	0	0	0	その他	231	92	465
特別資料	483	177	827	計	483	177	827
レプリカ	1	0	0				
計	1,755	4,383	827				

主な購入特別資料一覧

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
原稿	網野 菊	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	鮎澤福子	長谷川先生を憶ふ	原稿用紙
原稿	有馬さとえ	お逢ひした時雨女史	原稿用紙
原稿	生田花世	輝く部隊軍人遺族慰問	原稿用紙
原稿	生田花世	取水塔をのぞむ	原稿用紙
原稿	板垣直子	「現代小説論」を作った事情	原稿用紙
原稿	板垣直子	輝く部隊に就いて	原稿用紙
原稿	井上鶴子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	今井邦子	深き思ひ	原稿用紙
原稿	今井邦子	近時心境	原稿用紙
原稿	上田静栄	夏の夜	原稿用紙
書簡	江口章尼(章子)	長谷川時雨宛	和紙
原稿	円地文子	椿事	原稿用紙
原稿	円地文子	尼僧史の原稿	原稿用紙
原稿	大竹美子	農村から	原稿用紙
原稿	大田洋子	雪の晩	原稿用紙
名簿	芳村 直	岡本かの子氏追悼会(名簿)	原稿用紙
原稿	岡田禎子	朝鏡録一時雨 岡田禎子より	原稿用紙
原稿	岡田禎子	岡田禎子原稿 無題	原稿用紙
原稿	岡田禎子	最大と最少と	原稿用紙
原稿	岡田禎子	近頃のこと	原稿用紙
原稿	岡田八千代	時雨さん	原稿用紙
原稿	奥むめお	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	小田嶽夫	田端君と「狐の子」	原稿用紙
原稿	石中象治	ナチス詩集について	原稿用紙
原稿	甲斐仁代	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	金子せん女	破魔弓と菱葩餅	原稿用紙
原稿	河崎なつ	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	河杉はつ	落椿	原稿用紙
原稿	川瀬美子	れいめい	原稿用紙
原稿	神近市子	今書くのは辛い	原稿用紙
原稿	川上喜久子	冬至の日に	原稿用紙
原稿	北見志保子	北見志保子短歌	原稿用紙
原稿	窪川稲子	「旧聞日本橋」の長谷川さん	原稿用紙
原稿	黒田米子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	清谷閑子	禅の心境	原稿用紙
原稿	小寺菊子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	五島美代子	光	原稿用紙
原稿	小堀杏奴	春	原稿用紙
原稿	小山いと子	猫のことなど	原稿用紙

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
原稿	亀井勝一郎	白鳳の詩人	原稿用紙
原稿	上林 暁	外村繁著「白い花の散る思ひ出」	原稿用紙
原稿	木々高太郎	長谷川時雨様のこと	原稿用紙
原稿	斎藤 史	祝二千六百年	原稿用紙
原稿	杉浦翠子	時雨女史の偉大さ	原稿用紙
原稿	杉山房枝	きいろいたすき	原稿用紙
原稿	鈴木紀子	シナリオライター	原稿用紙
原稿	ささきふさ	海のいろいろ	原稿用紙
原稿	ささきふさ	今春の奈良京都	原稿用紙
原稿	ささきふさ	或渴き	原稿用紙
原稿	斎藤 瀏	歌集「みたみわれ」に敬歎す	原稿用紙
原稿	佐藤春夫	掬水譚覆刻版はしがき	原稿用紙
原稿	寿岳文章	「春寒」の句境	原稿用紙
原稿	鷹野つぎ	博き母愛	原稿用紙
原稿	高群逸枝	女性史を編むに就いて	原稿用紙
原稿	竹内てるよ	初冬(詩)	原稿用紙
原稿	田島準子	机上の感想	原稿用紙
原稿	田畑修一郎	関西の民家	原稿用紙
原稿	茅野雅子	時雨さんををしむ	原稿用紙
原稿	築添曙生	子供と時局	原稿用紙
原稿	辻村もと子	五月の森	原稿用紙
原稿	辻山春子	笑劇リレーその4 最初の危機	原稿用紙
原稿	辻山春子	ああ今一度	原稿用紙
原稿	津田あやめ	独奏会を催すに就て	原稿用紙
原稿	露木陽子	二本の団扇	原稿用紙
原稿	富本陽子	今朝の夢	原稿用紙
原稿	外村 繁	小さい者	原稿用紙
原稿	中河幹子	散華楽	原稿用紙
原稿	中里恒子	小さな町にて	原稿用紙
原稿	中島幸子	長谷川時雨先生を偲びて	原稿用紙
原稿	永瀬清子	病院通ひ	原稿用紙
原稿	仲町貞子	木田老人	原稿用紙
原稿	中村汀女	樹々芽ぐむ	原稿用紙
原稿	中本たか子	言葉の組織	原稿用紙
原稿	中本たか子	永遠の感謝	原稿用紙
原稿	中谷孝雄	思い出すまま	原稿用紙
原稿	新妻伊都子	家庭婦人としての女史	原稿用紙
原稿	長谷川かな女	声	原稿用紙
原稿	長谷川かな女	梅雨近し	原稿用紙
書簡	長谷川かな女	つや子宛	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	蓬萊の島より	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	風埃り	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	私の頁	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	すべてに感謝をもって	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	七種のお雑煮の日	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	兵隊さんに送りたい	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	無形の「愛の殿堂」	原稿用紙
原稿	長谷川時雨	青空訪問	原稿用紙
原稿	長谷川春子	秋天晃溪	原稿用紙
原稿	英 美子	翼の児を抱く	原稿用紙
原稿	林 芙美子	頃日所感一束	原稿用紙
書簡	林 芙美子	(幹事宛)	原稿用紙
原稿	林 芙美子	感想	原稿用紙
書簡	林 芙美子	若林つや子宛	原稿用紙
原稿	原 信子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	原 信子	あちらとこちら	原稿用紙
原稿	芳賀 檀	文学の「私」について	原稿用紙
原稿	平井恒子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	平塚らいてう	中国の若き女性へ	原稿用紙
原稿	平林英子	友の話	原稿用紙
原稿	平林英子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
原稿	平林たい子	室生さんのお言葉	原稿用紙
原稿	福田晴子	職業婦人聯盟の提唱	原稿用紙
原稿	藤川栄子	東満支の人々を囲む会	原稿用紙
原稿	藤原米子	岡氏の恋愛事件について	原稿用紙
原稿	古木鉄也	私怨の記	原稿用紙
原稿	藤田徳太郎	早川孝太郎氏著『農と農村文化』について	原稿用紙
原稿	真杉静枝	判りきつたことだが	原稿用紙
原稿	真杉静枝	虹のやうな存在	原稿用紙
原稿	若山喜志子	庭のはつ夏	原稿用紙
原稿	松田解子 他	長谷川時雨追悼文	原稿用紙
絵葉書		小樽関係絵葉書	絵葉書
絵葉書		札幌関係絵葉書	絵葉書
原稿	小熊秀雄	身のまわりの詩話	原稿用紙
色紙	真壁 仁	私が山行く旅路果てしれず	色紙
絵葉書	上野山清貢	聖徳記念集	絵葉書
絵葉書		札幌関係絵葉書	絵葉書
原稿	松田解子	感謝	原稿用紙
原稿	美川きよ	惚れた小説	原稿用紙
原稿	水町京子	若葉風	原稿用紙
原稿	宮本百合子	積極な一生	原稿用紙
原稿	宮本百合子	身振りならぬ慰めを	原稿用紙
原稿	中條百合子	二つの場合	原稿用紙
原稿	中條百合子	雨の小やみ	原稿用紙
原稿	森 茉莉	(銃後)	原稿用紙
原稿	森三千代	旅行に出られないわけ	原稿用紙
原稿	森三千代	時雨先生のかたみ	原稿用紙
原稿	森 律子	長谷川先生を惜しむ	原稿用紙
原稿	森本 忠	魚歌の作者	原稿用紙
原稿	矢田津世子	花火	原稿用紙
原稿	矢田津世子	東京駅にて	原稿用紙
原稿	柳原白蓮	(秋風)	原稿用紙
原稿	山内みどり	追慕	原稿用紙
原稿	山川菊栄	兵士の顔	原稿用紙
原稿	山川朱實	九江陥落の日	原稿用紙
原稿	山下勇	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	山本安英	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	湯浅芳子	母も育つ	原稿用紙
原稿	除村やゑ子?	クリミヤ半島から	原稿用紙
原稿	横田文子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	吉川江子	若い人、其の他	原稿用紙
原稿	余淑	「致中国青年女性」	原稿用紙
原稿	吉屋信子	女性の碑	原稿用紙
原稿	横山美智子	浄らかな雰囲気	原稿用紙
原稿	若林つや(杉山美都枝)	母への手紙	原稿用紙
原稿	若山喜志子	身辺涼味	原稿用紙
原稿	熱田優子	輝く部隊日記	原稿用紙
原稿	熱田優子	先生と私	原稿用紙
原稿	大谷藤子	旅立ちをひかへて	原稿用紙
原稿	岡田禎子	白菜漬	原稿用紙
原稿	素川絹子	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	中村汀女	雪	原稿用紙
原稿	小山いと子	あゝ	原稿用紙
原稿	山川朱美	(長谷川時雨追悼文)	原稿用紙
原稿	英美子	哀愁秋とともに	原稿用紙
原稿	四賀光子	(頌歌)	原稿用紙
葉書	小寺菊子	小寺菊子氏「深夜の歌」出版記念会案内状	官製葉書
葉書	大田洋子	大田洋子を祝う会案内状	官製葉書
葉書	円地文子	円地文子脚本集「惜春」出版記念会案内状	官製葉書
葉書		「牡蠣」出版記念会案内状	官製葉書
葉書	田島準子	田島準子「青雲」出版記念会案内状	官製葉書
葉書	長谷川時雨	『旧聞日本橋』の会案内状	官製葉書

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
葉書	輝ク会	輝ク会忘年会案内状	官製葉書
パンフレット	輝ク会	輝ク会忘年会パンフレット	パンフレット
葉書		昭和十三年の会案内状	官製葉書
葉書	輝ク会観劇部	明治座観劇会案内状	官製葉書
葉書	輝ク会観劇部	二月観劇会案内状	官製葉書
葉書	輝ク会観劇部	九月観劇会案内状	官製葉書
葉書	輝ク会	輝ク会遠足案内状	官製葉書
葉書	女人芸術社	全女性進出行進曲	私製葉書
葉書	女人芸術社	輝ク会年賀状	年賀葉書
入場半券	燦々會	「劇の講演会」入場券	入場券
葉書	林芙美子	若林つや子宛	官製葉書
葉書	林芙美子	若林つや子宛	絵葉書
葉書	林芙美子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	秋田雨雀	杉山美都枝宛	官製葉書
葉書	江口章子	輝ク会宛	絵葉書
葉書	林芙美子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	窪川稲子	若林つや子宛	官製葉書
葉書	河崎なつ	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	網野 菊	若林つや子宛	絵葉書
葉書	板垣直子	若林つや子宛	絵葉書
葉書	佐々木房	若林艶子宛	官製葉書
葉書	岡田八千代	杉山美都子宛	官製葉書
葉書	杉田静子?	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	松田解子	輝ク会宛	絵葉書
葉書	長谷川春子	輝ク会忘年会係宛	絵葉書
葉書	長谷川春子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	生田花世	若林つや宛	官製葉書
葉書	大田洋子	杉山美都枝宛	官製葉書
葉書	大田洋子	若林つや子宛	絵葉書
葉書	大田洋子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	大田洋子	若林ツヤ、横田文子宛	官製葉書
葉書	佐藤俊子	若林つや子宛	私製葉書
葉書	永瀬清子	若林つや子宛	官製葉書
葉書	小山いと子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	小山いと子	若林つや子宛	官製葉書
葉書	横山美智子	若林つや子宛	絵葉書
葉書	横山美智子	若林つや宛	官製葉書
葉書	今井邦子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	今井邦子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	今井邦子	長谷川時雨宛	私製葉書
葉書	網野 菊	若林つや子宛	官製葉書
葉書	神近市子	若林つや子宛	官製葉書
葉書	柳原燐子	輝ク会会計宛	官製葉書
葉書	同行四人	杉山美都子宛	絵葉書
書簡	岡田八千代	若林つや子宛	便箋
書簡	佐藤 俊	若林つや子宛	便箋
書簡	矢田津世子	若林つや宛	便箋
書簡	矢田津世子	若林つや子宛	便箋
書簡	鷹野つぎ	杉山美都枝宛	便箋
書簡	鷹野つぎ	若林つや子宛	便箋
書簡	三宅由岐子	若林つや子宛	便箋
書簡	中河幹子	輝ク会宛	原稿用紙
書簡	窪川稲子	若林つや子宛	原稿用紙
書簡	佐々木房	輝ク会宛	便箋
書簡	佐々木房	若林艶子宛	便箋
書簡	(佐々木)房	若林(艶子)宛	便箋
書簡	杉浦翠子	「輝ク」部隊編輯宛	原稿用紙
書簡	森茉莉	輝ク会宛	レポート用紙
書簡	長谷川かな女	若林つや宛	便箋
書簡	長谷川かな女	杉山美都枝宛	便箋
書簡	小金井素子	輝ク会宛	便箋

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
書簡	井上鶴子	若林つや宛	便箋
書簡	湯ヶ島和子	若林つや宛	便箋
書簡	斉藤 史	杉山美都枝宛	便箋
書簡	斉藤 史	杉山美都枝宛	便箋
書簡	間宮茂輔	若林つや宛	便箋
書簡	横田文子	杉山美都枝宛	原稿用紙
書簡	横田文子	杉山美都枝宛	原稿用紙
書簡	鷹野 継	(鷹野継書簡)	原稿用紙
書簡	英美子	若林つや子宛	便箋
書簡	野上やへ	若林艶子宛	封筒
書簡	森 律子	若林つや子宛	封筒
書簡	佐藤恒子	若林つや子宛	封筒
書簡	長谷川かな女	若林つや宛	封筒
書簡	生田花世	輝ク会編集部宛	封筒
書簡	有馬さとえ	若林つや子宛	封筒
書簡	河杉はつ	輝ク会宛	封筒
書簡	山川朱美	杉山美都枝宛	便箋
書簡	板垣直子	長谷川時雨、若林つや子宛て	便箋
写真(帖)	英美子	英美子肖像写真	写真
複写	林えり子	林えり子メオトピア物語	複写
絵画	若林つや	若林つやデザイン用紙	絵画
パンフレット	婦人団体業績発表会	昭和十四年度に於ける各婦人団体の業績	パンフレット
原稿	古川陽子他	各地通信	原稿用紙
原稿	?	(雪)	原稿用紙
原稿	?	(一昨日私は佐渡へわたり…)	原稿用紙
葉書	伊東さち子	杉山美津枝宛	絵葉書
葉書	真杉静枝	若林つや子宛	私製葉書
葉書	真杉静枝	若林つや子宛	私製葉書
葉書	城 夏子	杉山美都枝宛	絵葉書
葉書	(大石)千代子	杉山美都枝宛	絵葉書
葉書	(大石)千代子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	(大石)千代子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	有山千代子	長谷川時雨 杉山美都枝宛	絵葉書
葉書	長谷川かな女	若林つや宛	官製葉書
葉書	長谷川かな女	若林つや宛	官製葉書
葉書	佐藤恒子(中里恒子)	杉山美都枝宛	官製葉書
葉書	佐藤恒子(中里恒子)	杉山美都枝宛	官製葉書
葉書	吉水ちか子	長谷川時雨宛	私製葉書
葉書	吉水ちか子	長谷川時雨宛	私製葉書
葉書	根本芳子	長谷川時雨・『輝ク』の皆様宛	絵葉書
葉書	丹沢 豊	若林つや子宛	絵葉書
葉書	佐藤道子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	(川島?)つゆ	若林つや子宛	絵葉書
葉書	水藤富美子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	富本陽子	カガヤク宛	絵葉書
葉書	文(横田文子?)	杉山美津枝宛	絵葉書
葉書	川上喜久子	輝ク会宛	官製葉書
葉書	三宅由岐子	若林つや子宛	私製葉書
葉書	平林仙子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書		若林つや宛	絵葉書
葉書	木暮妙子	輝ク会宛	絵葉書
葉書	飯島松子	長谷川時雨宛	絵葉書
葉書	のぼる	長谷川仁宛	絵葉書
葉書		杉山美都枝宛	官製葉書
葉書		小寺菊子氏「深夜の歌」出版記念会宛	官製葉書
葉書		小寺菊子氏「深夜の歌」出版記念会宛	官製葉書
葉書		小寺菊子氏「深夜の歌」出版記念会宛	官製葉書
葉書	輝ク会	官製葉書	
葉書	輝ク観劇部	官製葉書	
葉書	川島つゆ	輝ク会宛	官製葉書
葉書	大石千代子	若林つや宛	絵葉書

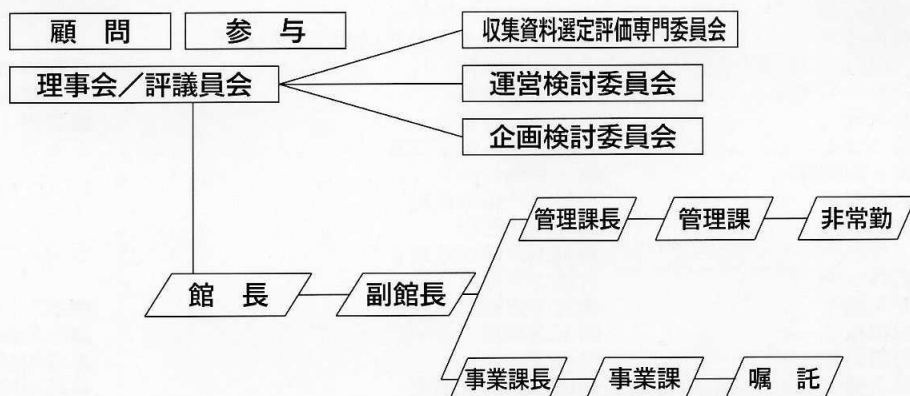
種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
葉書	江口章子	長谷川しぐれ・長谷川はる子宛	絵葉書
葉書	岩名ゆき	若林つや子宛	官製葉書
葉書	日向生	若林つや宛	絵葉書
葉書	川上喜久子	若林つや子宛	官製葉書
葉書	(中里?)恒子	若林つや子宛	官製葉書
葉書	(田文子)	杉山美都枝宛	絵葉書横
葉書	吉田生穂?	ドメス出版宛	官製葉書
葉書	芳賀檀	若林つや子宛	絵葉書
書簡	?	?	便箋
葉書	?	?	絵葉書
葉書	浅沼喜實浅沼清子	?	封緘葉書
葉書	山沢栄子	?	封緘葉書
書簡	古木すゑ	杉山美都枝	便箋
葉書	古野清人	杉山みつゑ宛	絵葉書
葉書	つづき泰子	杉山みつゑ宛	官製葉書
葉書	岡野正	杉山美都枝宛	官製葉書
葉書	?	?	封緘葉書
原稿	長谷川時雨?	輝ク会とはどういふ会か	原稿用紙
書簡	鷹野つき	若林つや子宛	便箋
書簡	(大田)洋子?	(若林)つや宛	便箋
その他		輝ク	
その他		輝ク	
名簿		(忘年会)会費領収(者リスト)	便箋
色紙	長谷川春子	蒙疆黄河渡船小景 春	色紙
原稿		席順表	原稿用紙
原稿		「輝ク」レイアウト	
パンフレット	輝ク部隊	輝ク部隊について	
パンフレット	輝ク部隊	輝ク部隊芸能会	
パンフレット	輝ク部隊	藤間会	
パンフレット	輝ク部隊	輝ク部隊家族寮訪問懇談会余興プログラム	
パンフレット	大和楽団	大和楽団第一回定期演奏会「歌詞並に解説」	
パンフレット		燦々会現在会員	
パンフレット		新しき土	
パンフレット		新しき土 試写会	
葉書	輝ク部隊	家族寮慰問懇談会御通知	官製葉書
葉書	輝ク会観劇部	明治座観劇会	官製葉書
葉書	輝ク会内発起人一同	(崇貞文庫への寄付について)	官製葉書
パンフレット	くろがね会	鎮遠之錨建碑	
その他	女人藝術社	女人藝術社封筒	封筒
パンフレット	長谷川時雨全集内容見本	日本文林社	
リーフレット	「新興浪漫派」準備委員会	「新興浪漫派」宣言	
切り抜き	芳賀檀	再建日本ロマン派宣言	
リーフレット	再建日本ロマン派同人	再建日本ロマン派宣言	
リーフレット	新興浪漫派準備委員会	日本浪漫派と芳賀檀君脱落の理由	
切り抜き	若林つや	「婦人時局研究会と」「輝ク部隊」	
切り抜き	杉山みつ枝	輝ク部隊	
切り抜き	村岡花子	時雨女史を憶ふ	
切り抜き	杉山みつ枝	輝ク部隊	
切り抜き	朝日新聞	遺児部隊ぞくぞく入京	
新聞	毎日新聞	故山本元帥声なき凱旋	
切り抜き	杉山美都枝	輝ク会のこと	
切り抜き	毎日新聞	日本浪漫派の再建をめぐる	
切り抜き	毎日新聞	日本浪漫派の再建をめぐる	
切り抜き	吉田健一	日本浪漫派論争の収獲	
切り抜き	芳賀檀	日本浪漫派について再言	
切り抜き		「日本浪漫派」を復刻出版	
切り抜き	芳賀檀	『日本浪漫派は「死せる犬」か』に答える	
切り抜き	芳賀檀	芳賀檀切り抜き(1)	
切り抜き	芳賀檀	芳賀檀切り抜き(2)	
書籍	芳賀檀	大學の理念と自由について	抜き刷り
書籍	芳賀檀	ニーチェの「権力への意志」の場合	抜き刷り

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
書籍	芳賀檀	ニーチェの「偉大な形式」について	抜き刷り
書籍	芳賀檀	R・Mリルケの形照の場合	抜き刷り
書籍	芳賀檀	芳賀矢一の遺志について	抜き刷り
書籍	芳賀檀	虚無への防堤と Diagnose	抜き刷り
書籍	芳賀檀	東西思惟観の相違	抜き刷り
書籍	芳賀檀	シュティフターの「晩夏」について	抜き刷り
書籍	芳賀檀	民族と自覚	抜き刷り
パンフレット		日本民族学協会創立二十周年略史	
原稿	芳賀檀	非ドイツ的ナチス	原稿用紙
原稿	芳賀檀	日本浪漫派再建	原稿用紙
原稿	芳賀檀	花園で	原稿用紙
原稿	(芳賀檀)	天使の顔	原稿用紙
原稿	(芳賀檀)	天使の顔	原稿用紙
原稿	芳賀檀	聖盃に	原稿用紙
原稿	芳賀檀	ばらの歌	原稿用紙
原稿	芳賀檀	盃	原稿用紙
切り抜き	芳賀檀	芳賀檀 切り抜き	
メモ	?	六月二十七日夜日本浪漫派の会	原稿用紙
書簡	芳賀檀	(杉山美都枝)宛	便箋
書簡	(芳賀檀)	(杉山美津枝)宛	便箋
書簡	(杉山美都枝)	(芳賀檀)宛	便箋
書簡	杉山みつゑ	芳賀檀宛	便箋
書簡	(杉山美都枝)	(芳賀檀)宛	原稿用紙
書簡	(杉山美都枝)	(芳賀檀)宛	原稿用紙
その他	杉山みつゑ	文集	
その他	杉山美都枝	文集	
その他	杉山みつゑ	読方学習反省	
その他		尋常科第四学年四組学級経営案	
ノート類		綴方帳	ノート
パンフレット	静岡県女子師範学校校友会	校友	
書籍	田方郡教育会	田方文園	
ノート類		尋一学級に関すること	ノート
パンフレット	静岡県教育会女教員部	女教員部総会記録	
パンフレット	静岡県女子師範学校同窓会	木蘭会名簿	
書簡	太田つな子	若林つや子宛	便箋
書簡	山田阿津子	若林つや子宛	便箋
書簡	山田阿津子	杉山美都枝宛	便箋
書簡	山田阿津子	杉山美都枝宛	官製葉書
書簡	山田阿津子	杉山美都枝宛	便箋
書簡	山田阿津子	杉山美都枝宛	便箋
書簡	山田あつ子	杉山みつゑ宛	便箋
書簡	山田阿津子	杉山美都枝宛	便箋
葉書	森埜壽枝	杉山みつゑ宛	官製葉書
その他		教育関係の雑件	
切り抜き	若林つや	若林つや作品切り抜き(1)	
切り抜き	若林つや	若林つや作品切り抜き(2)	
切り抜き	若林つや	若林つや作品切り抜き(3)	
原稿	杉山美都枝	おさるのめがね	原稿用紙
原稿	杉山美都枝	北窓	原稿用紙
原稿	杉山美都枝	童女と薔薇	原稿用紙
原稿	杉山みつゑ	暑中休暇を迎ふ	原稿用紙
原稿	杉山美都枝	徒然草の一部分に表れた兼好の趣味	原稿用紙
原稿	杉山美都枝	短歌添削	原稿用紙
原稿	杉山美都枝	短歌添削	原稿用紙
原稿	杉山美都枝	ちゑ子宛て	原稿用紙
ノート類	杉山美都枝	日記	ノート
ノート類	杉山美都枝	読書ノート	ノート
ノート類	杉山美都枝	輝ク資料	ノート
ノート類	杉山美都枝	日記	ノート
ノート類	杉山美都枝	野花	ノート
原稿	杉山美都枝	原稿雑件	原稿用紙

種 別	作 家 名	資 料 名	形 態
その他	杉山美都枝	雑件	
複写		Weekly Illustrated	コピー
その他	中野重治	作家クラブ	
切り抜き	若林つや	文学に憑れて半世紀	
切り抜き	若林つや	東日学芸ハウス落成記念ハイキング	
葉書	三輪(ふくまつ)	若林つや子宛	私製葉書
葉書	みわふくまつ	杉山美都枝宛	私製葉書
葉書	渋谷敬三	杉山みつゑ宛	絵葉書
書籍	遠つびと	短歌会同人遠つびと	
書籍	歌と観照社	歌と観照	
切り抜き	岩橋邦枝	長谷川時雨の日記	
切り抜き	岩橋邦枝	長谷川時雨伝	
切り抜き		長谷川時雨切り抜き	コピー
写真(帖)	若林つや	若林つや写真	
書簡	原田康子	勝又茂幸宛	便箋
書簡	原田康子	勝又茂幸宛	原稿用紙
書簡	更科源蔵	勝又茂幸宛	原稿用紙
書簡	船山馨	石原(勝又)茂幸宛	原稿用紙
書簡	八木義徳	多田裕計宛	原稿用紙
書簡	八木義徳	多田裕計宛	便箋
書簡	八木義徳	多田裕計宛	便箋
書簡	八木義徳	多田裕計宛	便箋
書簡	八木義徳	多田裕計宛	原稿用紙
書簡	八木義徳	多田裕計宛	便箋
葉書	八木義徳	多田裕計宛(12通)	官製葉書
原稿	八木義徳	不器用者の弁	原稿用紙
写真(帖)絵葉書		北海道関係戦前絵葉書帳	
原稿	更科源蔵	歴史を歩く 落人と脱走者の足跡	原稿用紙
原稿	真壁仁	瘦土集	原稿用紙
絵画	大井戸百合子	「れんばじ市場」	
絵画	大井戸百合子	「馬」	
絵画	大井戸百合子	「少女」	
書籍	吉田一穂	未来者	
書籍	吉田一穂	未来者	
書籍	吉田一穂	古代緑地	
書籍	吉田一穂	羅甸薔薇	
書籍	吉田一穂	黒潮回帰	
原稿	吉田一穂	白鳥古丹 火山湖	原稿用紙
原稿	吉田一穂	無の鍾 I	原稿用紙
葉書	吉田一穂	更科源蔵宛(18通)	官製葉書
書簡	吉田一穂	鷺巣繁男宛	
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	便箋
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	原稿用紙
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	原稿用紙
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	便箋
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	便箋
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	原稿用紙
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	便箋
書簡	吉田一穂	更科源蔵宛	原稿用紙

■ 組織及び役職員 ■

■ 組織機構図



■ 財団法人北海道文学館役員等の状況

＜理事・監事＞

役職名	氏 名	就任年月日
理 事 長	澤 田 誠 一	H10. 4. 1
副理事長	河 邨 文 一 郎	H10. 4. 1
副理事長	園 田 喜 武	H10. 4. 1
副理事長	木 原 武 男	H10. 4. 1
副理事長	小 杉 捷 七	H10. 4. 1
専務理事	西 村 信	H10. 4. 1
常務理事	池 田 忠 之	H10. 4. 1
理 事	朝 倉 賢	H10. 4. 1
理 事	小 笠 原 克	H10. 4. 1
理 事	神 谷 忠 孝	H10. 4. 1
理 事	木 村 敏 男	H10. 4. 1
理 事	工 藤 欣 彌	H10. 4. 1
理 事	島 安	H10. 4. 1
理 事	高 橋 良 雄	H10. 4. 1
理 事	高 畠 二 郎	H10. 4. 1
理 事	田 村 哲 三	H10. 4. 1
理 事	辻 協 啓 一	H10. 4. 1
理 事	永 井 浩	H10. 4. 1
理 事	村 井 宏	H10. 4. 1
理 事	山 名 康 郎	H10. 4. 1
監 事	斎 藤 大 雄	H10. 4. 1
監 事	平 中 忠 信	H10. 4. 1

＜顧問＞

伊 藤 義 郎 中 山 周 三 原 田 康 子 坂 野 上 明
堀 寛 三 浦 綾 子 堂 垣 内 尚 弘 八 木 義 徳

＜参与＞

上 西 晴 治(作家) 岡 澤 康 司(俳人) 重 森 直 樹(作家)
高 山 亮 二(文学研究) 長 野 京 子(児童文学) 平 山 廣(文学研究)
八 森 虎 太 郎(詩人)

＜評議員＞

氏 名	就任年月日	氏 名	就任年月日	氏 名	就任年月日
東 延 江	H10. 4. 1	斎 藤 一 郎	H10. 4. 1	富 田 正 一	H10. 4. 1
新 井 章 夫	H10. 4. 1	齊 藤 征 義	H10. 4. 1	鳥 居 省 三	H10. 4. 1
伊 東 廉	H10. 4. 1	桜 井 健 治	H10. 4. 1	中 山 昭 彦	H10. 4. 1
大 川 佐 稚 子	H10. 4. 1	佐 藤 庫 之 介	H10. 4. 1	永 田 富 智	H10. 4. 1
大 澤 哲 夫	H10. 4. 1	塩 見 一 釜	H10. 4. 1	新 妻 博	H10. 4. 1
小 野 規 矩 夫	H10. 4. 1	柴 村 紀 代	H10. 4. 1	萩 原 貢	H10. 4. 1
笠 井 嗣 夫	H10. 4. 1	菅 原 政 雄	H10. 4. 1	原 子 修	H10. 4. 1
笠 原 肇	H10. 4. 1	杉 野 一 博	H10. 4. 1	樋 口 游 魚	H10. 4. 1
加 藤 多 一	H10. 4. 1	鈴 木 光 彦	H10. 4. 1	菱 川 善 夫	H10. 4. 1
金 丸 義 昭	H10. 4. 1	鈴 木 八 駿 郎	H10. 4. 1	前 川 公 美 夫	H10. 4. 1
金 箱 戈 止 夫	H10. 4. 1	高 野 斗 志 美	H10. 4. 1	光 城 健 悦	H10. 4. 1
河 草 之 介	H10. 4. 1	高 橋 和 光	H10. 4. 1	南 利 一	H10. 4. 1
川 辺 為 三	H10. 4. 1	高 橋 康 雄	H10. 4. 1	藪 禎 子	H10. 4. 1
菊 地 慶 一	H10. 4. 1	武 井 静 夫	H10. 4. 1	山 下 和 章	H10. 4. 1
北 光 星	H10. 4. 1	立 花 峰 夫	H10. 4. 1	山 本 承	H10. 4. 1
木 村 真 佐 幸	H10. 4. 1	田 中 和 夫	H10. 4. 1	吉 田 秋 陽	H10. 4. 1
工 藤 正 廣	H10. 4. 1	田 中 厚 一	H10. 4. 1	米 谷 祐 司	H10. 4. 1
倉 島 齊	H10. 4. 1	谷 咲 子	H10. 4. 1	鷺 谷 峰 雄	H10. 4. 1
後 藤 軒 太 郎	H10. 4. 1	谷 口 亜 岐 夫	H10. 4. 1		
小 林 孝 虎	H10. 4. 1	千 葉 宣 一	H10. 4. 1		
小 櫛 山 博	H10. 4. 1	藤 堂 志 津 子	H10. 4. 1		
西 條 正 人	H10. 4. 1	時 田 則 雄	H10. 4. 1		

(注) 死去 中 山 周 三 H11. 9. 22 三 浦 綾 子 H11. 10. 12 八 森 虎 太 郎 H11. 10. 24
八 木 義 徳 H11. 11. 9 小 笠 原 克 H11. 12. 9 島 安 H12. 3. 16

＜収集資料選定評価専門委員会＞

氏 名	所 属 等
神 谷 忠 孝	理 事（日本近代文学）
小笠原 克	” （日本近代文学）
木 村 敏 男	” （俳 句）
田 村 哲 三	” （短 歌）
永 井 浩	” （ 詩 ）

＜運営検討委員会＞

氏 名	所 属 等
河 邨 文一郎	副理事長（ 詩 ）
朝 倉 賢	理事（小説、シナリオ）
工 藤 欣 彌	” （小 説）
西 條 正 人	評議員（会 社 役 員）
谷 口 明 雄	” （俳 句）

＜企画検討委員会＞

氏 名	所 属 等
園 田 喜 武	副理事長（俳 句）
小笠原 克	理 事（日本近代文学）
神 谷 忠 孝	” （日本近代文学）
木 村 敏 男	” （俳 句）
田 村 哲 三	” （短 歌）
永 井 浩	” （ 詩 ）

氏 名	所 属 等
加 藤 多 一	評議員（児 童 文 学）
工 藤 正 廣	” （ロシア文学）
柴 村 紀 代	” （児 童 文 学）
原 子 修	” （ 詩 ）

■職員名簿

職 名	氏 名
館長（財団副理事長）	小 杉 捷 七
副館長（財団専務理事）	西 村 信
副館長（財団常務理事）	池 田 忠 之
管 理 課 長	桑 原 拓
主 査	横 浜 隆 志
主 任	長 居 成 好
事 業 課 長	平 原 一 良
主 査	青 柳 文 吉
主 任	原 田 英 明
司 書	小 川 靖 子
主 任	宮 坂 頌 子
主 任	岡 本 茂 子
主 任	丹伊田 範 子

職 名	氏 名
主 事	米 澤 真 澄
主 事	田 中 順 美
主 事	成 田 麻衣子
主 事	僧 都 一 根
主 事	高 橋 明 子

■ 諸会議・運営日誌 ■

- H11. 4. 1 (木) 平成11年度道立文学館管理委託契約締結
- 〃 5. 1 (土) 所蔵品展「本庄陸男と『石狩川』」開幕（6月20日まで）
- 〃 5. 11 (火) 第1回企画検討委員会、資料収集選定評価専門委員会開催
- 〃 5. 18 (火) 第1回運営検討委員会開催
- 〃 5. 22 (土) 文芸セミナー「岩出山土族の自費移住について」（坂田資宏）
- 〃 5. 29 (土) 平成11年度第1回理事会、同評議委員会開催
- 〃 6. 5 (土) 常設展特設コーナー（小林多喜二自筆原稿展示他）開設
映像作品鑑賞のつどい「大地の侍」
- 〃 6. 6 (日) 一日全講「『石狩川』を読む」（工藤正廣）
- 〃 6. 19 (土) 映像作品鑑賞のつどい「大地の侍」
- 〃 7. 1 (木) 北海道文学館報第50号発行
- 〃 7. 17 (土) 文芸セミナー「アイヌ語・ことばの位牌を背負った者の一人として」（講師 萱野 茂氏）
- 〃 7. 25 (日) 夏休みファミリー文学館「ばくも・わたしも絵本作家」（7月30日まで）
- 〃 8. 7 (土) 特別企画展「夏目漱石と芥川龍之介」開幕（9月5日まで）
文芸講演会「夏目漱石と世紀末」（小森陽一）
- 〃 8. 17 (火) 学芸員養成実習（8月21日まで）
- 〃 8. 28 (土) 文芸講座「『吾輩は猫である』と夏目漱石」（高橋康雄）
- 〃 9. 8 (水) 企画展「北欧叙事詩『カレワラ』の光彩」開幕
- 〃 9. 12 (日) 文芸講座「カレワラ - 北の風土から芽ぶくもの -」（原子 修）
- 〃 9. 18 (土) 古書バザール（19日まで）
- 〃 9. 25 (土) 特別企画展「〈本〉はどこに向かうのか」開幕（12月5日まで）
- 〃 9. 29 (水) 文芸講演会「マー兄ちゃんの ちょっといい話」（北野 大）
- 〃 10. 12 (火) 第2回企画検討委員会開催
- 〃 10. 16 (土) 文芸セミナー「展示解説 デジタル化する〈本〉の世界」（当館主査 青柳文吉）
- 〃 10. 22 (金) 特別講演会「歴史の舞台と私」（吉村 昭 函館市芸術ホール）
- 〃 10. 29 (金) 全国文学館協議会展示情報部会開催
- 〃 11. 1 (月) サンクンガーデン第8号発行
- 〃 11. 19 (金) 特別講演会「開拓地の思想」（池澤夏樹 旭川市大雪クリスタルホール）

- H11. 11. 20 (土) 映像作品鑑賞のつどい「それから」
- 〃 11. 27 (土) 映像作品鑑賞のつどい「南京の基督」
- 〃 12. 14 (火) 学芸員養成実習 (12月18日まで)
- 〃 12. 18 (土) ロビーコンサート「ベーカーストリート・クリスマスライブ」
- 〃 12. 20 (月) 北海道文学館報第51号発行
-
- H12. 1. 8 (土) 冬休みファミリー文学館「たかどのほうこ・子どもの本の世界」 (1月23日まで)
- 〃 1. 16 (日) 「わくわく・へんてこランド」 (冬休みファミリー文学館の付帯事業として実施)
- 〃 2. 5 (土) 企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌」開幕 (2月17日まで)
- 文芸セミナー「伝統川柳と現代川柳のはざま」(斎藤大雄)
- 常設展特設コーナー (本庄陸男新資料) 開設
- 〃 2. 6 (日) 「対論〈視覚〉の時代を越えて…」 (企画展「VISUAL POETRY 2000 in 札幌」の付帯事業として実施)
- 〃 2. 25 (金) 第3回企画検討委員会・第2回資料収集選定評価専門委員会開催
- 〃 3. 2 (木) 第2回運営検討委員会開催
- 〃 3. 25 (土) 第2回理事会・評議員会開催
- 〃 3. 31 (金) サンクンガーデン第9号発行

＜付録＞

北海道立文学館利用規則

北海道教育委員会は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律（昭和31年法律第162号）第14条第1項並びに第23条第1号及び第12号の規定に基づき、この教育委員会規則をここに制定する。

（趣旨）

第1条 北海道立文学館の利用については、法令等に定めるもののほか、この教育委員会規則の定めるところによる。

（文学館の目的）

第1条の2 北海道立文学館（以下「文学館」という。）は、文学に関する書籍、原稿、書簡、文献、写真その他の資料及び文学者の遺品等（以下「文学資料」という。）を収集し、保存し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、併せてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする。

（文学館の事業）

第1条の3 文学館は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事業を行う。

- 1 文学資料を収集し、保管し、及び展示すること。
- 2 文学館が収集した文学資料を閲覧に供すること。
- 3 文学に関する展覧会、講演会、講座、映画鑑賞会その他の催し（以下「文学に関する催し」という。）を開催し、及び他の行うそれらの催しに協力すること。
- 4 一般公衆に対して、文学資料の利用に関し、必要な説明、助言等を行うこと。
- 5 特別展示室又は講堂（以下「特別展示室等」という。）を文学に関する催しの利用に供すること。
- 6 文学及び文学資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと。
- 7 文学資料の保管、展示等に関する技術的研究を行うこと。
- 8 文学に関する案内書、解説書、目録、図録、年報、調査研究の報告書を作成し、及び配布すること。
- 9 他の文学館、図書館、美術館、博物館、研究機関等と緊密に連携し、及び協力し、刊行物及び情報の交換、文学資料の相互貸借等を行うこと。
- 10 地域における学校、図書館、公民館等の教育又は文化に関する諸施設が行う文学に関する活動を援助すること。

- 11 その他文学館の目的を達成するために必要な事業

（開館時間）

第2条 文学館の開館時間は、午前10時から午後5時までとする。

2 文学館の管理運営上特別の必要があるとき又は非常変災その他急迫の事情があるときは、教育長は、臨時に、前項の開館時間を変更することができる。

3 前項の規定により開館時間を変更したときは、教育長は、その旨を文学館に掲示しなければならない。

(休館日)

第3条 文学館は、次に掲げる日には休館する。

1 国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日

2 月曜日

3 1月2日、同月3日及び12月29日から同月31日まで

2 文学館の管理運営上特別の必要があるときは、教育長は、前項に規定する休館日に開館することができる。

(臨時休館)

第4条 前条第1項に定めるもののほか、文学館の管理運営上特別の必要があるとき又は非常変災その他急迫の事情があるときは、教育長は、臨時に、休館することができる。

2 第2条第3項の規定は、前項の規定により臨時に休館する場合について準用する。

(入館の制限)

第5条 他人に迷惑を及ぼし、又はそのおそれがある者に対しては、教育長は、入館を断ることができる。

(入館者の遵守事項)

第6条 入館者は、文学館の利用につき、この規則及び教育長の指示に従うほか、特に次に掲げる事項を遵守しなければならない。

1 建物、附属設備又は文学館資料（文学館が収集し、保管し、又は展示する資料をいう。以下同じ。）を汚し、若しくは損傷し、又はそれらのおそれのある行為をしないこと。

2 他人に迷惑を及ぼし、又はそのおそれのある行為をしないこと。

3 指定の場所以外で飲食し、又は喫煙しないこと。

2 入館者が前項の規定に違反し、かつ、文学館の管理運営上支障があると認めるときは、教育長は、当該入館者を退館させることができる。

(入館の細目)

第7条 前2条に定めるもののほか、入館に関し必要な事項は、教育長が定める。

(観覧料の免除)

第8条 次に掲げる者が文学館における常設展示又は展覧会（特別企画によるものの展覧会を除く。）を観覧する場合は、その観覧料を免除する。

1 小学校の児童並びに中学校及び高等学校の生徒並びにこれらに準ずる者（特別展示を除く。）

- 2 小学校の児童又は中学校の生徒を引率する校長又は教員
 - 3 盲学校、聾^{ろう}学校及び養護学校の児童又は生徒の引率者
 - 4 児童福祉法（昭和22年法律第164号）第7条に規定する児童福祉施設に入所し、又は通園している少年及びその引率者
 - 5 身体障害者福祉法（昭和24年法律第283号）第15条第4項の規定による身体障害者手帳の交付を受けている者及びその引率者
 - 6 生活保護法（昭和25年法律第144号）による生活保護を受けている者
 - 7 児童相談所、精神薄弱者更生相談所、精神保健福祉センター若しくは障害者職業センターの長又は精神保健指定医により精神薄弱者と判定された者及びその引率者
 - 8 精神保健福祉センターの長、精神保健指定医又は精神科を標ぼうする医師により精神障害者（精神薄弱者を除く。）と判定された者及びその引率者
 - 9 老人福祉法（昭和38年法律第133号）第15条に規定する老人福祉施設に入所している者及びその引率者
 - 10 65歳以上の者
 - 11 その他教育長が前各号に準ずる者と認めるもの
- 2 前項の規定により観覧料の免除を受けようとする者は、同項各号に該当する者であることを証する書面を教育長に掲示しなければならない。
 - 3 第1項に該当する場合を除き、観覧料の免除を受けようとする者は、あらかじめ観覧料免除申請書（別記第1号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。
 - 4 教育長は、前項の規定により観覧料を免除するときは、観覧料免除書（別記第2号様式）を交付するものとする。
(特別展示室等の利用の承認)
- 第9条 文学に関する催しを行うため、特別展示室等を利用しようとする者は、あらかじめ、特別展示室等利用申請書（別記第3号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。
- 2 教育長は、前項の規定により特別展示室等の利用を承認したときは、特別展示室等利用承認書（別記第4号様式）を交付するものとする。
(特別展示室等の利用の不承認)
- 第10条 教育長は、前条第1項の申請が次のいずれかに該当すると認める場合は、その利用を承認しないものとする。
- 1 利用の目的が文学館の目的に沿わないとき。
 - 2 文学館の秩序を乱すおそれがあるとき。

- 3 文学に関する催しの料金が1人につき、1,350円を超えるとき。
 - 4 その他文学館の管理運営上支障があるとき。
- 2 教育長は、前項の規定により特別展示室等の利用を承認しないときは、申請者に対し、書面により、その旨を通知するものとする。

(特別展示室等の利用の承認の取消等)

第11条 教育長は、特別展示室等の利用の承認を受けた者（以下「利用者」という。）が次のいずれかに該当すると認める場合は、その承認を取り消し、又はその利用を制限し、若しくは停止することができる。

- 1 利用の申請に偽りがあったとき。
- 2 この教育委員会規則に違反したとき。
- 3 故意又は重大な過失により施設設備を破損し、又は滅失したとき。
- 4 その他文学館の管理運営上支障があるとき。

(施設設備の変更の禁止)

第12条 利用者は、特別展示室等の利用において、その施設設備に特別な設備をし、又は変更を加えてはならない。ただし、あらかじめ、教育長の承認を受けたときは、この限りでない。

(原状回復の義務)

第13条 利用者は、特別展示室等の利用を終了したときは、その利用に係る施設設備を原状に回復しなければならない。第11条の規定により利用の承認を取り消され、又は利用を制限され、若しくは停止されたときも、同じとする。

(使用料の免除)

第13条の2 特別展示室等の利用が次のいずれかに該当する場合はその使用料の免除を受けることができる。

- 1 道立文学館との共催により開催する文学に関する催しのため利用するとき。
- 2 その他教育長が必要と認めるとき。
- 2 前項の規定により使用料の免除を受けようとする者は、あらかじめ、使用料免除申請書（別記第4号様式の2）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。
- 3 教育長は、第1項の規定により使用料を免除するときは、申請者に対し、使用料免除書（別記第4号様式の3）を交付しなければならない。
- 4 教育長は、使用料を免除しないときは、申請者に対し、書面により、その旨を通知しなければならない。

(文学館資料の閲覧)

第14条 文学館資料（文学館が他から借り受けたものを除く。第2項、第4項及び次条から第19条までの規定において同じ。）を閲覧しようとする者は、あらかじめ、文学館資料閲覧申込書（別記第5号様式）を教育

長に提出しなければならない。

- 2 前項の規定にかかわらず、保存対策上特別の取扱いを要する文学館資料（以下「特別資料」という。）を閲覧しようとする者は、あらかじめ、特別資料閲覧申請書（別記第6号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。
- 3 教育長は、前項の規定により特別資料の閲覧を承認したときは、特別資料閲覧承認書（別記第7号様式）を交付するものとする。
- 4 文学館資料は、所定の場所で閲覧しなければならない。

（閲覧の制限）

第15条 この教育委員会規則その他の規程に違反した者及び教育長の指示に従わない者に対しては、教育長は、文学館資料の閲覧を禁止することができる。

（特別利用の承認等）

第16条 文学館資料の撮影、複写又は模造（以下「特別利用」という。）を行おうとする者は、あらかじめ、特別利用申請書（別記第8号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。

- 2 教育長は、前項の規定により特別利用を承認したときは、特別利用承認書（別記第9号様式）を交付するものとする。
- 3 特別利用は、教育長の指示に従って行わなければならない。
- 4 教育長は、特別利用の承認を受けた者が前項の規定に違反したときは、その承認を取り消すことができる。

（撮影品等の刊行等の承認）

第17条 文学館資料を撮影し、複写し又は模造したもの（以下「撮影品等」という。）を刊行し、若しくは複製し、又は研究発表等に使用しようとする者は、あらかじめ、撮影品等使用申請書（別記第10号様式）を教育長に提出し、その承認を受けなければならない。

- 2 教育長は、前項の規定により撮影品等の刊行等を承認したときは、撮影品等使用承認書（別記第11号様式）を交付するものとする。

（文学館資料の貸出し）

第18条 文学館資料は、次に掲げる者に対して貸出しをすることができる。

- 1 国立の博物館、博物館法（昭和26年法律第285号）第2条第1項に規定する博物館及び同法第29条の規定により文部大臣の指定した博物館に相当する施設の長
- 2 社会教育法（昭和24年法律第207号）第21条に規定する公民館の長
- 3 国立の図書館及び図書館法（昭和25年法律第118号）第2条第1項に規定する図書館の長
- 4 学校教育法（昭和22年法律第26号）第1条に規定する学校の長

5 その他教育長が適当と認める者

2 前項の規定により貸出しを受けようとする者は、あらかじめ、文学資料貸出申請書（別記第12号様式）を教育長に提出し、承認を受けなければならない。

3 教育長は、前2項の規定により文学館資料の貸出しを承認したときは、文学資料貸出承認書（別記第13号様式）を交付するものとする。

（貸出期間等）

第19条 文学館資料の貸出期間は、30日以内とする。

2 前項の規定にかかわらず、教育長は、特に必要と認めたときは、文学館資料の貸出期間を延長することができる。

3 教育長は、必要があるときは、貸出期間中であっても、文学館資料の返還を求めることができる。

（破損等の責任）

第20条 文学館の入館者、特別展示室等の利用者、文学館資料の閲覧者若しくは特別利用を行う者又は文学館資料の貸出しを受けた者が、その施設設備又は文学館資料を破損し、又は滅失したときは、これを原状に回復し、又はその損害を賠償しなければならない。

（補則）

第21条 この教育委員会規則の施行に関し必要な事項は、教育長が定める。

附 則

（施行期日）

この教育委員会規則は、平成7年1月4日から施行する。

附 則

この教育委員会規則は、公布の日から施行する。

（様式は省略）

平成11年度年報

HOKKAIDO MUSEUM OF LITERATURE

北海道立文学館・(財)北海道文学館

〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1 番 4 号

TEL (011) 511-7655 FAX (011) 511-3266

[印刷：中西印刷株式会社]